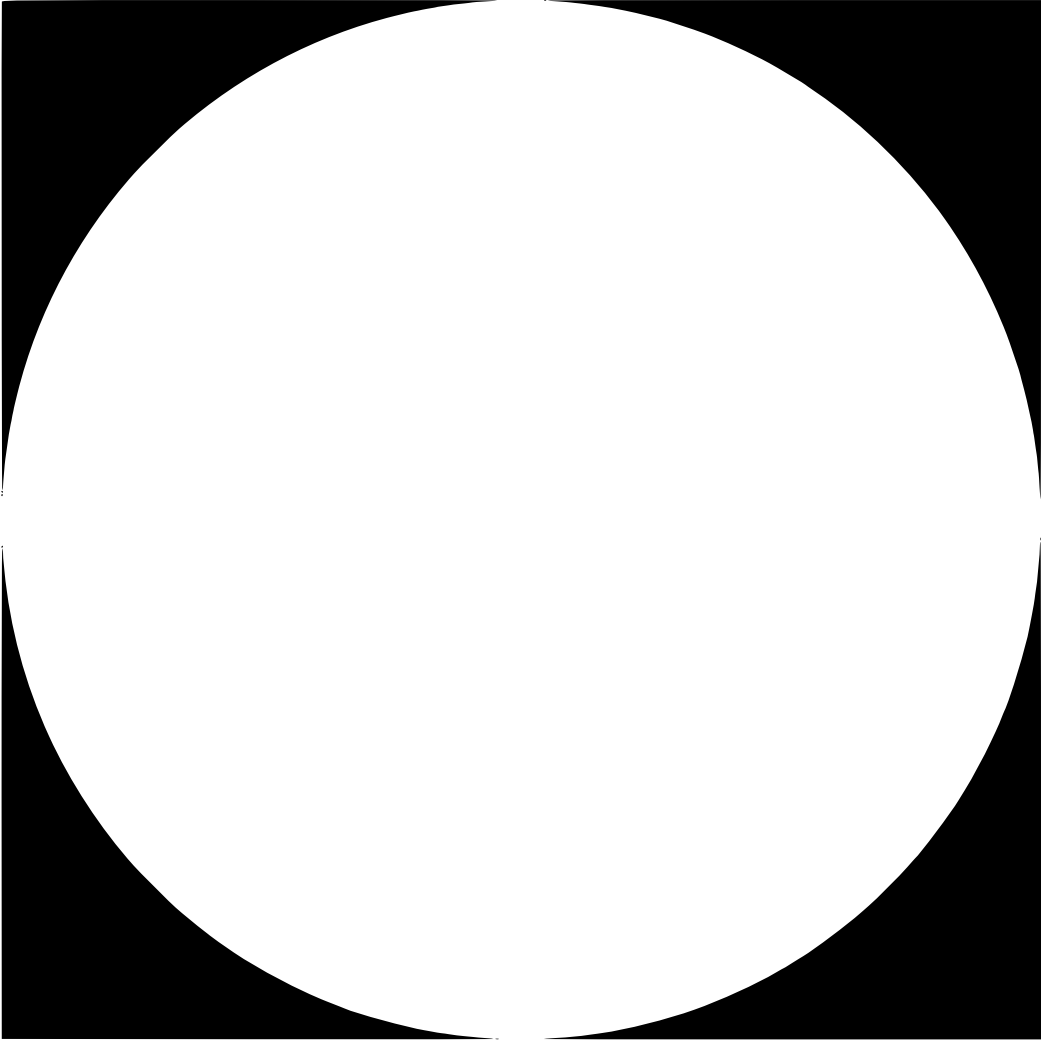


2018.9.29(土) Start 18:00

Age Of

by Oneohtrix Point Never



自由料金制 Name Your Price

by Masamichi Furukawa

はじめに

今回は、Oneohtrix Point Never（以下OPN）ことダニエル・ロパティン（以下DL）の最新作『Age Of』の解説を行います。

なぜ取り上げたかと言えば、流行り云々ではなく、ロック史には例えばデヴィッド・ボウイの『ジギー・スターダスト』のような音だけでなく（それだけで本一冊書けてしまうくらいの）物語が付随するコンセプト・アルバムというものがありますが『Age Of』にも同じかそれ以上の多層的なアイデアを感じたからです。

しかし、今の国内メディアの紹介だけでは話が断片的でそのコンセプトを捉えにくいいため、折角の物語がちょっと勿体無いという思いから、本人が挙げた書籍や海外メディアのインタビュー記事、東京のDLが登壇したトークイベントでの本人への直接質問などから（一次情報を大切に）全てまとめてみる事にしました。

※トーク前半は、DLの出自、経歴、ルーツを説明しましたが他のメディアでも紹介されている事ですので割愛し、アーカイブは『Age Of』の解説にフォーカスします。

『Age Of』の話に入る前に、前作『Garden Of Delete』（2015）にて今作の布石とも言える部分があるのでまず紹介させて下さい。

このアルバムは、モチーフの一つとして1490～1510年の間に描かれたとされるネーデルラント（フランドル）の画家ヒエロニムス・ボスの『快樂の園（The Garden of Earthly Delights）』という絵画が使われています。

この作品はルネサンス時代の気風を受けて作られた、当時としてはかなりパンチの効いた宗教的祭壇画です。

ルネサンスの時期というのは、ローマ教皇の免罪符の発行で腐敗したキリスト教会（カトリック）に対しマルティン・ルターが「聖職者や教会を通さずとも個人が聖書を読んで神にアクセスすれば良い」と宗教改革を起こしたり、芸術・思想の分野でも「新約聖書後の世界以前のギリシャ、ローマの古典文化にもう一度目を向け創作していこう」と文芸復興したり、旧態依然とした宗教世界観や封建社会の束縛から脱して人間性の解放、個性、ヒューマニズムを取り戻そう、という変革のあった時代です。

『快樂の園』は、パトロンの貴族の依頼で作られたもので、両翼扉は開いた状態で220×389cm、閉じた状態（両翼裏面には天地創造の地球も描かれている）で220×195cmという大きさの「三連祭壇画」と言われるものです。

左翼パネルは、神とともにアダムとエヴァが登場するエデンの園（創造）、中央パネルはタイトルにもなっている作品のコア部分で、知恵の実を食べてしまった人類の暴走というべき現世の快樂（墮落）の世界。快樂に耽ける大勢の裸の男女（黒人の姿もある）、奇妙な動物、謎の建造物など混沌とした世界が描かれています。

そして右翼パネルは地獄（天罰）で、その罰として人間たちが奇妙な悪魔や怪物から苦痛や拷問を受ける様が描かれています。

非常に空想めいた絵ではありますが、それまで描かれる事がなかった、人類の本性や多様性、文化の謳歌といったリアルな生が感じられるものが表現されています。この感覚はブリューゲルや後ほど触れるフランソワ・ラブレーのような文芸作家、それ以降もダリなどのシュルレアリスムの作家にも継承されます。

0. 『Garden Of Delete』について

DLは、現代のポップ・ミュージックをこのヒエロニムス・ボスの絵のように見せたかったと言っています。確かに「Sticky Drama」のMVを観れば、ボスの混沌とした世界との類似性を見出せます。

また、2016年にはボス生誕500年記念として『The Garden Of Dreams』というドキュメンタリー映画も制作されており（因みに、全て頭文字が「GOD」と略せる）、その中に2010年頃からオランダでやっているボス・パレードというボス絵画の仮装パレードの様子が映りますが、これも「Sticky Drama」の映像世界と似ています。

こうしたルネサンス期に芽生えた多様性のある表現と現在を重ねて見るような視点が次作『Age Of』へと発展していきます。

The Garden of Earthly Delights by Hieronymus Bosch



A. アノーニとの討論

1. 『Age Of』の構造 A. アノーニとの討論

では『Age Of』の解説に入ります。
まず全ての発端はOPNがアルバムのプロデュースを手がけたトランスジェンダーのシンガーソングライター、アノーニとの討論から始まります。
DLはツアー中に「1万年後には人類は資源を奪いつくし絶滅するんだから、環境を考えることは意味がない」というような話をし、かなり激しい口論になるくらい彼女を怒らせてしまったそうです。
「君はニヒリストだ」と罵るアノーニに対し、自分は本当にそうなのかと悩みまくった末に「このアルバムを彼女へのラブレターにした」とDLは言っています。

それから、DLはミュージシャンの友人ジェイムス・フェラーロとブック・クラブ（同じ本を仲間と同時に読みディスカッションする読書クラブ）を行う中でホプスやウィリアム・ストラウス&ニール・ハウの共著『フォース・ターニング 第四の節目』から着想して、人類史に「4つのサイクル」を設定します。
さらに、それをスタンリー・キューブリックの映画『2001年 宇宙の旅』からヒントを得て、人類滅亡後のスーパーインテリジェンス（超絶知能）となったAIの視点で捉えるという構図を作り映像化を行います。

それがこのアルバムが出る前にニューヨークから行われたライブツアー「MYRIAD」の宣伝デザインやトレーラー映像として発表されました。

因みに、この人類が地球の資源を奪いまくって行き詰まり、やり直しても同じ事を繰り返してしまうというサイクルの描き方はダーレン・アロノフスキー（1969年～）の映画『マザー！』とよく似ています。

出自の話になりますが、アロノフスキーもDLも同じアメリカ在住のロシア系ユダヤ人の家系です。DLはブレジネフ政権下のソ連から米国に亡命したユダヤ人系の両親（ピアニストのお母さんとバンドマンのお父さん）の子で、生まれた時（1982年）はすでに米国でしたが「自分はずっとどこにも属していない」という感覚で生きていたそうです。

そしてそのおかげで想像力が豊かに育ったとも語っています。こういうある種のアウトサイダー視点というか、ユダヤ・ルーツの移民の人たちからすれば米国のプロテスタントの金儲けは神も認める良い事だという資本主義精神や科学万能主義みたいな考えにはちょっと引いた目で見てしまう、そういうバイアスがあるのではないかと。あまり語られませんが、OPNの作品作りにはその辺も割と影響しているんじゃないかと私は思っています。

ECCO（右上）

言語が生まれる前の時代。境界や重力もない人類以前の世界。

HARVEST（右下）

言葉や道具を活かす時代。収穫すると共に地球にも与え返す。

EXCESS（左下）

世界が発展を遂げる時代。人類は与え返す以上のものを得る。

BONDAGE（左上）

多くを得過ぎて肥大し、人類が行き詰まってしまう時代。



B. グロテスク・リアリズム

1. 『Age Of』の構造

B. グロテスク・リアリズム

では、ここで使われているこのイラストは何だろう？という事ですが、これが2つ目の構造の話となります。

これは『パンダグリュエルの滑稽な夢』という木版画家フランソワ・デブレとリシャール・ブルトンという人が1565年に制作した版画のイラストです。このような異形のキャラクターは120体もいます。



これはフランス・ルネサンスを代表する人文主義者の作家フランソワ・ラブレー（1494頃～1553頃）の『ガルガンチュワとパンタグリュエル』（中世の巨人伝説に題材を取った騎士道物語のパロディー）という作品をモチーフにしたイラストで、ラブレーの死後作られたものです。

と、ここでもルネサンス期の作品をモチーフに世界観が作られていきますが、このラブレーの文学作品はヒエロニムス・ボスみたいな高級なものではなく、もっと庶民的で低俗なものです。

一節を挙げると、巨人族のガルガンチュワの誕生は大食いの母親が下痢をして強力な下痢止めを飲んだので出られなくなり、子宮から静脈に入り耳から生まれ、その後酒を飲んで悪戯を繰り返し尻の拭き方の研究を始めると父親に評価され、訪れる町先では放尿して住民を流し、戦争になれば抜いた木で敵の城を叩き潰すなど冒険を繰り広げる…とまあかなり無茶苦茶な話です。

で（ちょっとややこしいのですが）DLはこの荒唐無稽なラブレーを18世紀になって評論をしたロシアの思想家ミハイル・バフチン（1895年～1975年）の著書『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』（1965年）を大変評価しています。

「とても好きな部分があって、それは『歴史は嘘だ』というような事を言っている。我々が認識している歴史は、混沌とした複雑な世界を注意深く整えて残したもので、真実は街の市場で起こっている。人々が笑いあったり、悪いジョークを言っていたりする中にね。それを読んだ時に、すぐにこのアルバムのこと 생각이浮かんで、その昔の16世紀の時代に同じことを思っていた友達がいたということに気づいて嬉しかったんだ」と言っています。

で、さらに「現代のフランソワ・ラブレーを挙げるとしたらジョン・ラフマンのような作家だ」とも言っているんです。この人は先ほど紹介した「Sticky Drama」のMVも作ったアーティストです。

B. グロテスク・リアリズム

ミハイル・バフチンはラブレールの民衆文芸を「グロテスク・リアリズム」と名付け「高位のもの、精神的なもの、理想的なものを格下げし、すべて物質的・肉体的次元へと移行させるシステム」と記しています。この「グロテスク」というのは最近のOPN作品のテーマにもなっています。

この言葉は、気持ち悪いとかエグいとかそういう意味で使われていますが、本来は15世紀末のローマの壁画装飾に使われた、洞窟や地下室を表す言葉です。ですので、意味合いとしては「民衆文化やアンダーグラウンドにこそがリアルがあるんだ」、「歴史の上澄み（ピラミッドの上部の話）では全ては説明できない」というスタンスを表明しているのだと思います。

そして、この「グロテスク・リアリズム」を後のポスト・モダンやポスト構造主義の前触れだという見方があります。

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ（1925～1995年）と精神分析学者フェリックス・ガタリ（1930～1992年）は、共著『千のプラトー』で、西欧文化の知を形作ってきた伝統的な認識方式である「ツリー（樹木）」構造に対して「リゾーム（地下茎）」という概念を提唱しました。

平たく説明しますと、「ツリー」というのは可視的で体系化できるもので、国家や組織、論理など画一的な価値観で成り立っているようなものが該当します。

対してリゾームというのは、いつどの方向にいつ生えるか分からない偶然性がある地下茎のイメージで、ロジックでは説明しにくいものや多様な価値観を表します。

ポスト構造主義で大切にされたのはこのリゾーム部分で、ここに目を向けないと本当の世界は語れない、という視点の提唱でした。

今日でいうと多種多様なアカウントが無数に存在するネット・コミュニティ、SNSの世界がまさにリゾームだと言われています。確かにそこには社会的には大半価値は無いけれども「ツリー」の世界では語れない本音やリアルな生というものが間違いなく存在します。

当時のルネサンス期のフランスというのも王や聖職者という特権階級と、あとはおびただしい数の貧しい小作人、という中間がない世界。ラブレー論では、そんな民衆が市場や広場で酒を飲んで世の中の愚痴を言ったり、アホな事をやったり笑ったり、カーニバル（祝祭）をしたりしている市井の事が書かれています。

DLはそれを現代の、特に巨大テクノロジー産業の発展で一部に富が集中し、知識主義とグローバリズムが加速し、中産階級が続々と崩壊して、貧困層やインターネットのネット・コミュニティ（オルタナ右翼なども含む）が増えている米国の状況に重ねています。例えば、可視化された部分（ツリー）では民主党のヒラリー・クリントン優勢みたいに言われていたのに、現実にはドナルド・トランプを生み出してしまっている。そういう事は全然起こり得るしリアルは可視化できない部分（リゾーム）に存在しているんだ、というような事を言っています。

C. ブルーカラー・シュルレアリスム

1. 『Age Of』の構造

C. ブルーカラー・シュルレアリスム

そして、3つ目の構造は「ブルーカラー（労働者階級の）シュルレアリスム」です。

この『Age Of』のジャケットの絵は、ジム・ショー（1952年～）という現代芸術家の『The Great Whatsit（偉大なる例のもの）』という作品です。

「現代人はノートブックの光に導かれ、テクノロジーの果てに輝かしい未来を見つめるー この作品から伺える、技術に対するある種の能天気さは、コンピューター黎明期の広告デザインを彷彿とさせ、そのタッチからは、ポップアートのレトロさも感じさせる。

この作品が表現するのは、ある種の警鐘というよりも、テクノロジー社会の相対化とも観ることができ、どれだけテクノロジーが進化しようとも、消費者と商品（あるいは技術）との関わりは変容することがない、ということが受け取れる」と作品解説にあります。



C. ブルーカラー・シュルレアリスム

ジム・ショーは、ミシガン大学時代にノイズ・ミュージック・バンド「デストロイ・オール・モンスターズ」というバンドを有名なマイク・ケリー（1954年～2012年）とやっていた人です。

マイク・ケリーはインсталレーションやパフォーマンス、ぬいぐるみを使った作品（ソニック・ユースの『Dirty』のジャケットでも有名）などをやっていた西海岸アートのキー・パーソン。

彼はデトロイトの労働者階級の家庭に生まれ、同地を本拠とするイギー&ストゥージズなどのパンク・ロックに強い影響を受けバンドを結成します。その原経験をもとにロサンゼルスで「労働者階級からの目線で作る芸術こそがリアルなものだ」と活動したのがこの人たちです。

彼らの表現をDLは「ブルーカラー（労働者階級の）シュルレアリスム」と名付けています。先ほどのバフチン／ラブレール論とこうして並べてみると全く同じような視点の話で、なぜ彼のアートワークを起用したかが分かります。「70年代くらいの郊外に住む3人の女性が描かれていて、驚嘆したような目を向けている。まるで2012年製のMacbook Proが自分たちを救ってくれるジーザスか何かのように。でもそれは何と入れ替わってもいい。チーズバーガーでもブリーフケースでも何でもいい。それは自分がアルバムを『Age Of』と名付けたのと発想が同じだったんだ。全てを包み込む何か。全ての人々を繋げている何か。それが何なのかは分からないけど、ものすごくおかしい逆説であるとともに真実でもあると思ったんだ」

DL自身はこうコメントしています。

ここでひとつ。アルバムの「Black Snow」という曲の歌詞で、1990年代に活動した「サイバネティック文化研究ユニット」のニック・ランド（1962年～）というイギリスの思想家の「Meltdown」という論文などが引用にされた事が日本ではやたら引き合いにされていますが、これはあくまでこの曲とMVのモチーフに使用しただけで、作品のコンセプトとしてそれほど関わるものではないと思います。

この後説明しますが『Age Of』は、資本主義は良くない、行き過ぎた人類や科学に警鐘だ、みたいなSFのテンプレのような話ではありません。このMVでは、他にも竹内公太という人が代理人として展示した「福島原発の指差し男」の映像もモチーフになっていますが、それと同じ程度のものだと捉えておいた方が妥当だと思います。

2. 「MYRIAD」とは何か

A. AI論のいま

ここまでまとめますと『Age Of』は アノーニとの討論（「MYRIAD」構想の原点）、グロテスク・リアリズム、ブルーカラー・シュルレアリスム、と大きく3つで構成されているという話でした。
この先はさらにツアーのタイトルでもあり、このコンセプトのコアである「MYRIAD」の物語について解説したいと思います。

DLは「MYRIAD」というのは「1 万年後に人類のことを高次の生命体となったAIが夢想するオペラだ」と語っています（ここからはYouTubeなどで「MYRIAD」のトレーラー映像にご覧頂いてからお読みされる事を推奨します）。まず、映像は現代やら中世やら時代を分け隔てなく色々な画像が飛び交う所から始まります（中には任天堂の『MOTHER』の画像なんかもあります）。これはAIが読み取っている人類史のメモリーです。ここでの地球は、人類が資源を奪うだけ奪い滅びてしまい、自転すら止まりその機能が停止してしまった状態です。そしてそこに訪れるAIは、人類に取って代わって進化を勝ち得たスーパーインテリジェンス（超絶知能）でおそらく電脳化していてもう肉体は捨てています。では、なぜDLはそんな視点を描いたのでしょうか。それにはここ最近のAIブームも背景にあります。その辺りも踏まえておく面白いので紹介します。

A. AI論のいま

現在は、第3次AIブームの時代です。

第1次AIブームは、1950～60年代に起こりました。最初は大砲を打った時の弾道計算や爆弾の破壊力の測定のためにコンピューターが開発され「これからは何でもコンピューターで計算できるんじゃないか」と言われた時代です。そして、1980年代に家庭へのコンピューターの普及とともに、第2次AIブームが起こります。その特徴として「エキスパートシステム」が挙げられます。

「エキスパートシステム」とは専門家の知識をコンピューターに教え込み、現実の複雑な問題を人工知能に解かせる事を試みたシステムです。

そして、2000年代に入って、インターネット／クラウドの普及とコンピューターの自主学習の時代になり第3次AIブームが始まります。この辺りでAIがチェスの世界チャンピオンを負かしたり、IBMのワトソンという機械がクイズ番組で人間に勝ったり、GoogleによってAIがディープラーニング（深層学習）でYouTube画像から猫の認識に成功したりと、また盛り上がり始めるんですね。

この流れで見ると確かに計算、統計、予測などの性能はぐんぐん上がっていますが、しかしこれらとて所詮ビッグデータの応用で、我々がSF映画で観たような「人間みたいな複雑な思考回路を持ったAI」というものではありません。

しかし、こういう事は1960年代の当初からマサチューセッツ工科大学の人工知能研究所の創設者の1人で人工知能の父とも言われるマービン・ミンスキー教授（1927年～ 2016年）が「もうすぐ人工知能にすごい波がきて、人間の言葉が理解できるAIが出来る」というような事を言っていたり、その後もこの世界の人たちはずっと「もう出来る、もう出来る」詐欺みたいな事を続けてきているんです。

最近ですと、今のAIの権威のレイ・カーツワイル博士（1948年～）が「2045年にはシンギュラリティ（技術的特異点）が訪れて、AIが人間の知能を越えて、AIが自らAIをアップデートし始める」とか言い出していて、また高次のAIが生まれるという気運が高まっています。

第3次AIブームを推進させているのはこうした科学者の発言だけではありません。

カンタン・メイヤスー（1967年～）というパンテオン・ソルボンヌ大学の哲学者を含むチームが、思弁的实在論という人間が不可知なものを思考するのに有効な考え方を提唱しました。

この实在論は前述のジル・ドゥルーズたちのポスト構造主義をさらにアップデートさせたもので、ポスト・ポスト構造主義として今話題の思考法です。

先ほど偶然性を帯びたリゾームというポスト構造主義の考えを紹介しましたが、この思弁的实在論はさらにそれを押し進めて「全ては偶然のもとにありそれは必然である」という所まで発展させます。

また、カント以来の西洋哲学は全て人間主体のものの見方であり、そういう相關主義を断ち切って非人間主義で考えないと人知を超えたものにはアクセスできないとしています。

これが高次AIみたいな超越的なものを作ろうとする科学の力を保証するような言説に繋がります。

A. AI論のいま

また、メイヤスーはまだ未完らしいですが「神の不在」というプロジェクトも打ち立てていて、これは言ってしまうと、哲学者として神の存在を認めてしまうというものなんです。

否定ではなくて不在です。「神様は今はいないが偶然、突然いつ生まれるか分からない」ものだ。さらにこの人は「突然誕生した神様は過去に不幸な死に方をした人を全員復活させる」という（ちょっと大丈夫かみたいな）話もしています。

ここまでくるともうある種の不死論とか復活論の話で、ユダヤ・キリスト教（一神教）の領域に繋がってくるんですね。

つまり、ここきて哲学・宗教・科学が非常に接近している。AIを生み出すというのは、頭脳（思考・感情・感性）というものが記述可能で、コンピュータ一技術が高まれば再現も可能という脳科学の技術追求の話です。

ユダヤ・キリスト教圏の人にとっては、神は全ての創造主であり、世界は神にプログラムされたものという宗教的なバイアスがあって「人間の思考や脳の構造ですら、記述可能で再現可能」という話は非常に受け入れやすいものなんだそうです。そしてその論理を詰めていくと、科学技術が無限に進歩するのならば、いずれ脳機能もコード化可能で高次のコンピュータで全部解明してもらえるんじゃないかと敷衍していく。

つまり、現代のAIブームやシンギュラリティ仮説というのは、世界は全て論理で説明できるというユダヤ・キリスト教の「一神教的世界観」、高次のコンピュータでもって脳機能を書き出そうとする「脳科学」、そして神の存在を科学で保証し直す「最新型の実在論」、この3つがいま背景としてあります。

DLは大学で西洋哲学を学んで大学院にまで行って音楽をしている人なので、こういう状況は当然踏まえて今作の物語を作っていると思います。
1 万年後の世界であれば、シンギュラリティが起これば人類は滅亡して、新しい進化を迎えているのは（偶然の）必然である、と。「MYRIAD」における「ECCO」のように人類以前の状態や人類滅亡後という人間抜きの視点で考えようというのは、思弁的なアプローチと言えます。

B. 進化の物語

2. 「MYRIAD」とは何か B. 進化の物語

もう一つ「MYRIAD」の映像に関して踏まえておくべき事があります。この映像で、高次の知的生命体であるAIが地球から何かを吸い上げています。これ何をしているのかと言いますと、地球にヒューリスティック・テストをかけている、と言うんですね。ヒューリスティック・テストというのは計算機科学の世界で「特定のアルゴリズムから必ず正しい答えを導けるわけではないが、ある程度のレベルで正解に近い解を得ることができる方法」とされているものです。母である人類の歴史を解析しているんです。では、なぜAIはそんな事をしたのでしょうか？

それはこの物語が進化の話である事を知れば見えてきます。この物語はスタンリー・キューブリック監督の1968年の映画『2001年宇宙の旅 (2001: A Space Odyssey)』からアイデアを得て作られていると先ほど申しました。この映画は、キューブリックがSF小説の祖とも言えるアーサー・C・クラークの『前哨』という小説を基に「長く語り継がれる優れたSF映画を作る」というテーマのもと、宇宙の誕生から人類の次の進化形態までの超越的領域の出来事を、当時最新の技術と科学、哲学でもって映像化する、という壮大なプロジェクトでした。話は人類の夜明けから始まります。ある類人猿がモノリスという黒い板に触れた途端、知恵を授かって道具を作れるようになり、別種族の類人猿を骨製のこん棒で撲殺するという有名なシークエンスです。

それまでは「猿は猿を殺さない」（同種の殺しはない）とされていた所、レイモンド・ダート（1893年～1988年）という人類学者が北京で見つかったアウストラロピテクスのいくつかの頭蓋骨に傷を発見し「キラエイク仮説」を提唱しました（今は否定されています）。

この映画は、その仮説をベースにしている神によって進化を選ばれる種というのは「殺す事で次の進化を勝ち得た種である」という進化論の話となっています。そもそもダーウィンの進化論と基督教の矛盾は大変な論争を生んでいましたが、ピエール・テイヤール・ド・シャルダン（1881年～1955年）という神父兼科学者の人が「進化も神の意志である」として神の存在と進化論を結びつけてしまった所から折り合いが付き始め、この映画もそれを踏まえて作られています。

「我々には知恵を授けてくれた先輩がいる」という様々なSFでよく見る設定は、この人の考え方がベースになっています。

因みに、モノリスとは1：4：9という比率で作られた四角柱で、この数字は「1の二乗・2の二乗・3の二乗」と最初の3つの自然数からなっていて、知的生命体が知的生命体に対して存在を伝えるメッセージと言われるものです。ここで「MYRIAD」の映像に戻ります。この「MYRIAD」のロゴにも付随している九つの光る四角形が地球の前に現れますよね。これはモノリスという事なんです。モノリスは地球からメモリーを吸い取ったあと、大きくなり段々と四角と円だけの『Age Of』のロゴに変形していきます。この四つの角は、さらに先ほどの人類史の4サイクルにもかけてあるそうで、この辺が何ともオタク心をくすぐります。

B. 進化の物語

話を映画に戻しますと、これは進化の物語であると。

知的生命体の先輩からモノリスによって知恵を授かった選ばれし類人猿は「殺す」事で次の進化を与えられる。そして時代は流れ、人類は「じゃあ自分たちの創造主って何なんだ」と自分たちの創造物（子）であるHAL9000という最新のAIを従えて科学の力で宇宙に出る（因みにこのHAL9000は、前述の人工知能の父マービン・ミンスキー教授がちゃんと監修しているという徹底ぶりです）。

このAIは人間並みの思考回路を持っていて、途中、精神疾患になって乗組員を次々と殺していくんですが、ここで創造主に会う前に次の進化をかけたデスマッチが発生するんですね。神の子人類か人類の子AIか、という。それで最終的には、ボーマン船長という人類が勝って、ワープしてホワイト・ルームという場所に移され、次の進化形態（ニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」に基づき、赤ちゃん）になって地球に帰還する、という話です。

この映画の原題は『2001: A Space Odyssey』と言います。

オデッセイというのは紀元前8世紀ごろの古代ギリシアのホメロスの叙事詩で、トロイ戦争後、オデッセウスが故郷に帰還するまでの10年間を描いた話です。この映画はそのオデッセイの超未来版として描かれています。

因みにオデッセウス一行がサイクロプスという一つ目の巨人に一人ずつ食べられていくという場面がありますが、宇宙船を管理し搭乗員を殺していったHAL9000のデザインが一つ目なのはここにかかっている訳です。

で、この「MYRIAD」もこの流れで「帰還」する話になっています。1万年後の全知全能の存在になったAIは、行くところまで行った存在。これ以上自分たちはどうすればいいのか、更なる進化のヒントを求め、母である人類の歴史を紐解くために地球に帰って来ます。

因みに「MYRIAD」というのは「My Record = Internet Addiction Disorder（記録は無秩序なインターネットにある）」、「My Riad（RiadはHomeを意味する）」という二つの意味が込められているそうです。

「MYRIAD」の高次AIは、ヒューリスティック・テストによって人類のアルゴリズムを解析したあと、吸い上げられた膨大なデータの中から自分たちにとって必要なもの・不必要なものを分類します。AIは人類が正史としてきたような歴史は見向きもしません。逆に注目したのは、先ほど紹介したリゾームの部分です。こういう文明の下にある文化や、可視化・言語化できないような一見無駄なものの中に「次の進化として欠けているものは退化だ」という事を見出していく。

こういうシンギュラリティ後の世界というのはSFの世界ではもう定番ですし、これまでロックの作品にもポスト・アポカリプス的な世界観を打ち出したものはありました。今作に関してもそういう終末観を表現した作品だ、というメディアの説明も散見します。

しかし「MYRIAD」はそうした滅びすらも何度も繰り返した先にある進化の話です。そしてSFと言われる大半の作品が、人類への警鐘、テクノロジー批判、といった（ポスト・モダン的な）オチになるのに対して、DLは最新の実在論でAIが人類史のリゾームの部分肯定するという物語を作った、この辺がちょっと新しいのかなと私は思っています。

例えば『風の谷のナウシカ』もヒドラというAIを作ったシンギュラリティ後の世界ですが、そこで描かれた旧人類が設定した人類再生プログラムは滅亡してから千年くらいしか経っていないせいか「汚れた世界」と「清らかな世界」という二元論で、まだそこまで頭が良くないですね。OPNが描いたAIの方が1万年も経ってるせいか賢いわけです。

C. アノーニへのラブレター

2. 「MYRIAD」とは何か

C. アノーニへのラブレター

ではこの話の最後です。

この作品は「1 万年後には人は絶滅するんだから、環境を考えることは意味がない」と言ったDLに対し、「君はニヒリストだ」と言ったアノーニとの激しい口論から全てが始まり、『Age Of』は彼女へのラブレターになった、という話をしました。

論争を経てこの作品をラブレターとして伝えた事はどういう事だったのでしょうか？「ニヒリストだ」と罵られた事に対してDLは答えを出せたのでしょうか？

私はこのように答えを用意したのだと思います。確かに人類は滅びる。それは間違いない。

けれども、次の進化形態として選ばれた生命体はおかしな存在ではない。また同じような過ちを繰り返さないためにも正しい歴史…硬直した社会構造のその下にある、歴史の中では実利的ではなく無駄とされたもののの中に本当の歴史があると考え、アップデートのためにアップグレードは必要はなく、ダウングレードの中に進化があると考え、そういう極めて理知的な捉え方をする生命体へと進化しているはずである…と、これがDLがこの『Age Of』を彼女へのラブレターとした意味だと思います。



